



名古屋市演劇練習館アクテノン

Nagoya City Performing Arts Studio (formerly Inabaji Water Tower) brings to mind an ancient Greek temple

## ギリシャの神殿を連想させる「名古屋市演劇練習館 (旧稲葉地配水塔)」

### 愛知県名古屋市

Special Features / Conversion of civil engineering facilities



基礎地盤コンサルタンツ株式会社 / 技術本部 / 物理探査部  
佐々木勝 (会誌編集専門委員)  
SASAKI Masaru

特集  
土木施設の転用

#### バルテノン神殿のような円柱構造物

白い円筒状の巨大な構造物の周囲を円柱が一定間隔で取り囲む。圧倒的な存在感を醸し出すこの構造物はまるでギリシャのパルテノン神殿を連想させる。住宅街の公園の中にそびえ立つこの構造物を果たして初見で何の施設なのか分かる人がいるのだろうか。

この構造物は名古屋市演劇練習館という、演劇練習専用の施設である。名古屋市の西部、中村区の稲葉地公園内にあるこの建物は、もともとは稲葉地配水塔という水を送るための施設であった。配水塔とは高い位置に水槽を設置することにより、送水する際に十分な水圧を与えるための施設である。

稲葉地配水塔は鉄筋コンクリート製で高さ29.47m、水槽の直径33m、水槽容量3,930m<sup>3</sup>の配水塔であり、1937 (昭和12) 年に建設され、1944 (昭和19) 年にその役割を終えている。その後、図書館を経て現在は演劇練習館として使われ、「アクテノン」という愛称で地域の

シンボルとして市民からも親しまれている。

2度の転用を経て現在に至っている名古屋市演劇練習館であるが、ここで一つの疑問が生じる。当初の役割である配水塔としては約7年しか稼働していない。なぜわずか7年で配水塔の役割を終えたのだろうか。

#### 急激な人口増に対応

名古屋市の近代水道の歴史は100年以上前まで遡る。濃尾平野を流れる木曾三川の一つである木曾川から取水して沈澱池、浄水場を経て東山配水池へと運ぶ計画を、1908 (明治41) 年に国から認可を受けた。1910 (明治43) 年着工し、1914 (大正3) 年に完成して給水を開始した。その後も給水需要を満たすため拡張事業は継続して行われ、1925～1929 (大正14～昭和4) 年度に行われた第3期拡張事業では、高台の水圧不足に対応するため東山配水塔 (現東山給水塔) が造られた。東山配水塔は鉄筋コンクリート製の容量313m<sup>3</sup>、高さ



写真1 東山給水塔 (旧東山配水塔)



写真2 配水塔の基礎工事。おそらく木杭を打設している

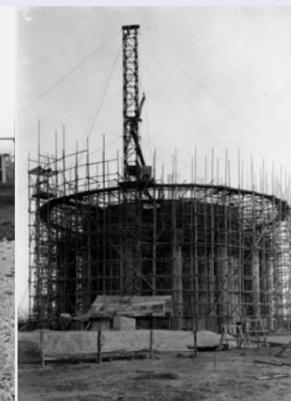


写真3 建設中の配水塔

37.85mの配水塔である。

給水人口100万人を目標とした第3期拡張事業であったが、名古屋市の人口は増加の一途をたどり、将来の市の発展に適応させるためには十分でないと考えられた。そこで人口150万人を目標とした第4期拡張事業が1928 (昭和3) 年に計画され翌年着工した。この事業の一端として、当時の名古屋市の東端にあった東山配水池から遠い名古屋市西部の水圧低下を防ぐため、稲葉地配水塔が計画された。

稲葉地配水塔の設計者は当時名古屋市の技師であり、東山配水塔の設計も行った成瀬薫である。当初の設計は容量590m<sup>3</sup>で東山配水塔を拡大したような形状であった。しかし地域の発展が目覚ましく、使用水量の激増が予想されたため、水槽の容量が3,930m<sup>3</sup>に変更された。容量が7倍近くも大きくなった水槽を支えるために16本の補強柱を円周上に設置したため、パルテノン神殿を連想させるような特徴的な外観となった。そして稲葉地配水塔は1937 (昭和12) 年5月31日に竣工した。

稲葉地配水塔は、水道使用量が少ない夜間に配水管の水圧を利用して高架水槽へ揚水して、昼間は自然流下で配水を行った。

#### 配水塔としての役割の終わり

1944 (昭和19) 年、第5期拡張事業による周辺区域の配水管増強が完了した。これにより稲葉地配水塔の役割は終了した。

第5期拡張事業は1937年3月に認可申請している。この拡張事業では稲葉地配水塔からほど近い位置に大治浄水場 (1946年に半完成) を新設し、1日最大給水量26万2,000m<sup>3</sup>をポンプ圧送給水する計画になっている。これが何を意味するかというと、第5期拡張事業

の計画を認可申請したとき、即ちまだ稲葉地配水塔が完成する前に、稲葉地配水塔は不要になることが決まったのである。それではなぜ配水塔を不要にするような拡張事業を行ったのだろうか。

一つは予測を超える人口増加に対応するためである。1937年に周辺町村の編入により名古屋市の人口は120万人に達し、人口において東京、大阪に次ぐ第3の都市となった。前年に第4期拡張事業は一部を除き完成したが、事業計画を立てた当時の予想をはるかに上回る市勢の発展は、数年後には給水量が不足することは明らかであった。そのため1日最大給水量50万m<sup>3</sup>を目標として、既設施設の23万8,000m<sup>3</sup>の不足分を補うための給水施設を計画することとなった。

もう一つ、戦時体制に向けての軍部からの要請もあった。名古屋市南部には軍需工場が多く、水が不足することはあってはならないため、水道施設の整備は急務であった。

このような理由により水道施設の拡張が行われ続けた。需要急増に対応するための施策が最優先だったのだろう。こうして稲葉地配水塔は配水塔としての運用を



写真4 稲葉地配水塔竣工

短時間で停止した。その後は名古屋市水道局の倉庫として利用されていた。

## 図書館へと転身

長い間、名目上は倉庫ではあるが、廃屋同然であった稲葉地配水塔は1965(昭和40)年7月、中村図書館として利用されることになった。配水塔としての機能を失ってから実に20年以上経ての再生である。

当時の名古屋市には鶴舞、栄、熱田、南の4つの図書館があったが、市民からは身近なところに図書館がほしいとの要望が出ていた。そこで当時の市長杉戸清は「1区1図書館」を公約に掲げ再選を果たした。そこで中村区の図書館として稲葉地配水塔が再利用されたのである。なぜ配水塔に目をつけたのかは定かではないが、杉戸市長が元水道局長であったので、廃屋同然の配水塔の有効利用を考えていたのかもしれない。

図書館として使用するにあたり、改修工事が行われた。当時、円形の図書館は全国的にも珍しく、改修の参考にするために関西大学の円形図書館(現円神館)の視察も行われた。改修では次の3点に留意したと言われている。①配水塔の外観をできる限りそのまま保つこと、②吹き抜けの部分に書庫を集めること、③地震に耐えること。①において外観の変更は窓の拡幅工事のみであった。それも③の耐震性を保つために最小限に留めた。②は配水塔の構造は中心から心柱、内壁、外壁からなっており、心柱と内壁の間は吹き抜けであった。この吹き抜けの部分に書庫を設置した。

このようにして旧稲葉地配水塔は図書館へと生まれ変わり、市民から親しまれる存在となった。開館当初は珍しさもあり、連日大勢の人が列をなして訪れるなど賑わいを見せたという。1982(昭和57)年に

は日本建築学会が「建築学的に重要な約2,000棟」の一つとしてとりあげ、1989(平成元)年には名古屋市の都市景観重要建築物にも指定されるなど歴史的・文化的価値も注目されるようになった。

しかし、やはり図書館として造られた建物ではないため、様々な問題も顕在化してきた。入り口にスロープを設けてほしいという要望があがったが、構造上スロープの設置は不可能であった。また各階の階段も高齢者にとっては辛い急角度であった。1985(昭和60)年には市

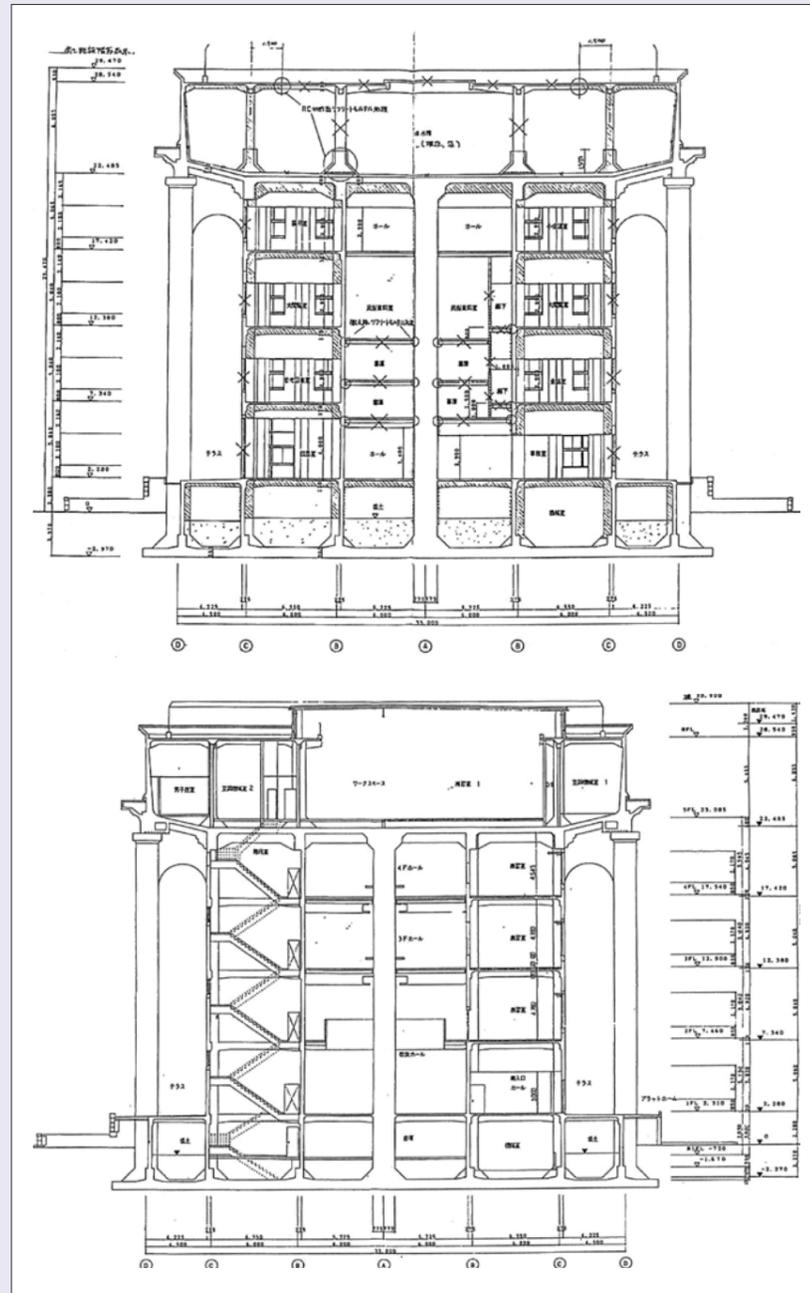


図1 中村図書館撤去時(上)と演劇練習館(下)の断面図



写真5 元は水槽だったリハーサル室

写真6 館内に残る配管

写真7 稲葉地公園

議会で「中村図書館は、改造後20年を経ており傷みが激しいが、改築の考えはないか」とただされた。このように構造的な問題と老朽化から図書館移転の機運が高まり、図書館は中村公園内に移転することが決まった。そして1991(平成3)年、中村公園内に移転した。

## 市長と俳優の対談から

図書館移転後の旧稲葉地配水塔の利用については、様々な活用案があがったがなかなか決まらなかった。

1991年11月、当時の市長西尾武喜が名古屋で劇団を主催する天野鎮雄と対談した際に、「発表する劇場はたくさんあるが、練習する施設がない」と言われたことがきっかけで演劇練習館へと転身することとなった。西尾市長も元水道局長であり、配水塔を図書館へと改修した際には施設課長として工事に携わっていた。

その後、1994(平成6)年から12億2,700万円をかけて改修工事が行われた。地域のシンボルとなっている外観を保存しつつ、レイアウトの変更が行われた。最上部に位置する水槽をリハーサル用の部屋に改装する際には、広い空間を確保するために一部水槽内の柱の撤去も行われた。強度を保ちつつ広いスペースを確保するのは大変な作業であったと想像できる。

翌年12月、名古屋市演劇練習館「アクテノン」として2度目の再生を果たした。「アクテノン」とは、演劇の「アクト」と水の「アクア」、それと「パルテノン神殿」を合成した愛称である。

水槽であった5階はリハーサル室となり、照明や音響機器が完備されている。2階から4階は5つの大練習室、3つの小練習室に加え、和室や研修室もあり、野外劇場も備えている。演劇やミュージカル以外にもバレエ、日舞、詩吟、ダンスなどの練習に利用されている。2017(平成29)年度は延べ6万5,000人以上が利用し、日数月平均利用率は99%を超えている。2度のリノベーションを経た旧稲葉地配水塔は、全国的にも珍しい演劇練習専用の施設として現在でも賑わいを見せている。

## 地域のシンボルとして

演劇練習館を取り囲む稲葉地公園はグラウンドやコミュニティセンターなどもあり、市民の憩いの場ともなっている。そこに舞台道具のような大きな荷物を持った人が来て、演劇練習館に吸い込まれていく。初めて見る人には驚きを与えるギリシャ風建物だが、市民にはあって当たり前の存在になっているのだろう。廃屋同然となっていた倉庫時代には、「無用の長物だから壊せ」「シンボルだから残せ」という両方の意見があったようだが、現在リノベーションを受けて新たな役割を担っているこの施設は、もう「無用の長物」とは言われないであろう。

1996(平成8)年に「名古屋市演劇練習館及び稲葉地公園」として名古屋市都市景観賞を受賞し、2014(平成26)年には旧稲葉地配水塔として土木学会選奨土木遺産に認定された。2度転用されたこの演劇練習館は、土木施設の再生利用の重要かつ貴重な事例であると言える。そして何よりも地域のシンボルとして愛され続けたこの白亜の建物が、今後もこの地域を見守るように立ち続けてほしい。

### <参考資料>

- 1) 「名古屋水道百年史」名古屋市上下水道局 2014年
- 2) 「感激なき人生はうつろなり 若手技術者への伝承」西尾武喜 2005年 水道産業新聞社
- 3) 「地域資産としての名古屋市演劇練習館(旧稲葉地配水塔)に関する研究」田中英・岡田昌彰 土木計画学研究・論文集Vol.24 No.2 土木学会 2007年
- 4) 「さよなら配水塔の図書館 中村図書館25年のあゆみ」名古屋市中村図書館 1991年
- 5) 「水の話あらかと 水の土木遺産 旧稲葉地配水塔」水とともに2010年1月号 No.76 水資源機構 2010年
- 6) 「見どころ土木遺産 旧稲葉地配水塔」中村晋一郎 土木学会誌Vol.101 No.10 October 土木学会 2010年
- 7) 「名古屋市演劇練習館紹介」公益財団法人名古屋市文化振興事業団

### <取材協力・資料提供>

- 1) 名古屋市演劇練習館
- 2) 名古屋市上下水道局 水の歴史資料館

### <図・写真提供>

- 図1 名古屋市演劇練習館  
写真2、3、4 名古屋市上下水道局 水の歴史資料館  
P22上、写真5 飯塚理恵 写真1 塚本敏行  
写真6 高橋真弓 写真7 佐々木勝